

Title	「4・12クーデターと作家達」（その1）：葉紹鈞と茅盾の場合
Author(s)	岡田，英樹
Citation	大阪外国語大学学報. 33 p.133-p.147
Issue Date	1975-01-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80545
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「4・12クーデターと作家達」(その1)

——葉紹鈞と茅盾の場合——

岡 田 英 樹

The Coup d'état on April 12th and the Writers (Part 1)

—— the Case of *Yeh-shao chün* and *Mao tun* ——

Hideki-Okada

The Chinese Communist Party and the Nationalist Party were unified in January of 1924. This unified power promoted by leaps and bounds the liberation struggle in China. Chinese writers expected much from this struggle and so they plunged themselves into it. Therefore, they were greatly shocked at the coup d'état by *Chiang-chieh shih*, a right winger in the Nationalist Party.

This article aims at looking into the inner lives of these writers. *Ni-huan chih* by *Yeh-shao chün* and *Shih* by *Mao tun* are discussed here. This coup d'état deeply affected those who had sincerely grappled with the self-contradictory reality of Chinese society. Especially *Mao tun*, who was involved in the revolutionary movement, was greatly disappointed. He began to recognize the contradictions in the revolution and to severely criticize them.

は じ め に

1924年1月、広東で開かれた第1回国民党大会で、「国共合作」の方針が正式に決定された。(この第1次国共合作は、国民党と共産党が組織的自律性を保持したまゝに、統一戦線を結成するというのではなく、共産党員が、その党籍を残したまゝ、国民党に加入するという形をとったものである。)この統一が成功した背景には、コミンテルンの直接的な指導と、それを受け入れた孫文らの努力があったことは勿論であるが、5・4運動以来、高まりを見せてきた労働者・農民の運動が、それを大きなところで支えてきたことも、見逃がせぬ点である。

この「国共合作」によって、中国の労働・農民運動は飛躍的な前進を見せる。労働運動が量的

にも、質的にも昂揚期を迎えたことを示す典型的なものが、5・30事件である。青島にある日本資本の紡績工場に起こったストライキに端を発する労働者の闘いは「打倒帝国主義」のスローガンの下、正に、全中国を揺り動かす大闘争に発展する。この運動は、労働者・学生にとどまらず、小ブル階級や民族資本家をも巻き込んだ民族統一の一大闘争であり、作家達に与えた影響も大きなものがあった。

この中で、1926年7月には、蒋介石を総司令とする「国民革命軍」によって「北伐」が開始される。「第1次国内革命戦争」と呼ばれるこの闘いは、「反帝・反封建」の旗を掲げ、各地に割拠する軍閥を打倒し、中国の統一を目指すものであった。この革命軍は、広東を拠点として、各地で澎湃として起こる労働運動・農民運動の強力な支援と呼応して、怒濤の如く中国全土の解放を押し進めた。1927年の初めには、揚子江流域に至る中国南部は、ほとんど国民党の支配するところとなった。

この革命軍によるあいつぐ勝利と、革命の急速な進展は、夜明けを告げる鐘の声として全国に鳴り響いた。学生や知識人の多くは、単に傍観者として事態の推移を見守っていたのではない。争ってこの革命闘争の渦中に身を投じていった。こうした人々の中に、「文学革命」の烽火を上げ、「5・4運動」を経験した作家達も多くみられた。茅盾・郭沫若・成仿吾・錢杏邨・蔣光慈・聞一多・林語堂等の名をあげることができる。

しかし、こうした人々の歓喜、熱情、希望は、一夜にして悲哀、幻滅、絶望にとって変わる。南京に拠を構えた蒋介石が、4月11日夜、突如として上海の労働者の武装を解除し、翌日には、上海総工会を占拠して、共産党員を一斉に弾圧するクーデターを行なったからである。このクーデター、粛清の嵐は、革命が成功して、まだ間もない南京、杭州、広州等の都市に急速に波及していった。共産党と国民党左派の強い連帯によって、この国民党右派の反動攻撃に耐えてきた武漢政府も、7月15日、ついに共産党員追放を決定した。ここに、3年余りにわたって続いた第1次国共合作は崩壊し、白色テロが吹き荒れ、厳しい言論弾圧が加えられる暗い冬の時代が、始まるのである。

この国共の分裂は、国民党右派と、左派・共産党の対立抗争、そして、右派の勝利という形をとっているが、その内実は決して単純なものではない。

一つには、国民革命の驚異的な急展開により、自己の權益が危くなった列強が、国民党右派の懐柔、抱き込みに強く乗り出したこと。

一つには、革命が進展し、労働者・農民の運動がエスカレートするにつれ、国民党幹部の中の地主や民族資本家達が、自らの基盤を掘り崩されるという恐怖感と危機感を持ち、革命の進展を押しとどめようと図ったこと。

最後に、中国共産党自身が、労働者・農民の統一した力に依拠するのではなく、国民党との分裂を回避するという方向にのみ腐心していたこと。（これは、陳独秀の右翼日和見主義として「8・7会議」で批判される。）

以上の様な歴史状況の中で、中国革命は頓挫した。「辛亥革命」に続く、第二の「裏切られた

革命」を、経験することになったのである。

特に、1917年の「文学革命」に始まる中国近代文学の歴史にとっては、昂揚から急激な下降へという時代の曲折を体験した最初であった。しかも、文学者の多くは、これ迄積み重ねてきた、自己の文学的営みを背景に担いつゝ、直接、間接にこの革命運動に参加してきていた。それだけに、この「挫折」の持つ重みは、あの「辛亥革命」の挫折感とは、質的に異なったものとなったはずである。そうした文学者の内面を、作品を通して探ってみたいというのが、この小論の目的である。さまざまな作家がおり、さまざまな行動があった。それらの中から、とりあえず葉紹鈞の「倪煥之」と茅盾の「蝕」三部作をとり上げてみたい。

葉紹鈞・「倪煥之」

1930年に単行本として発行された「倪煥之」作者自記には、これは、「去年(1928年—注岡田)1月に書き始めて、11月15日にでき上った。その間は、12回に分けて書いた。」とある。『教育雑誌』第20巻・1期から12期にかけて連載された長篇小説である。

その内容は、辛亥革命—5・4運動—5・30事件—4・12クーデターと、10数年にわたる中国社会の激動期に生きた、一人の若い、誠実な教育者、即ち、倪煥之の生きざまを描いたものである。

「倪煥之」 この作品は、作者葉紹鈞の創作活動の中にあって、他の小説群とは、少し違った位置付け 位置付けがなされねばならないと思われる。

1914年、雑誌『礼拝六』に発表した、文語による「窮愁」等は除くとしても、葉紹鈞は、既に、1919年には創作活動を始めている。それ以降の、彼の精力的な創作活動は、その創作の面で、20年代の中国近代文学を支えてきたといえる。それらの作品が、全て短篇小説で、この「倪煥之」が、最初にして最後の長篇小説であった、というのみではない。否、長篇でなければならない必然性を、この作品は持っていたのである。

葉紹鈞の一連の作品には、作者の身边に生起し、作者自身が体験した小事件を素材とし、矛盾を内包した社会の中で動揺し、慌てふためき、嘆き悲しみ、方向を見い出し得ない知識人の姿が、諷刺的に描き出されている。こうした作品の特徴は、茅盾が既に指摘するところであるが、(注)1 今、作者自身の言葉で、その点を押さえてみよう。

「私は、あることを正しくないと感じると、すぐに筆を執って、それを諷刺する。私の叙述は、当然に、私の認識と理解の範囲を越えることはできない。認識と理解が不充分であれば、叙述されたものは、歪み、変形されたものになってしまう。これは免れ難いことだ。しかし、私は常に自己主張の部分を最小限に留めるよう意を払っている。……もし私が、自己主張の部分を多く取り入れるなら、諷の範囲を越えることになるだろう。」(注)2

この主観を排し、客観的に、諷刺の目をもって描くという彼の創作態度は、後で触れるであろう、矛盾の文学理論と重なる部分が大きい。この創作態度の中から、短篇小説集「隔膜」(1922)、「火災」(1923)、「城中」(1926)、「線下」(1925)、「未厭集」(1928)が、作り出されるのである。

ところが、今、「倪煥之」をみる時、同質のトーンを持ちながらも、別の要素をも指摘することができる。

まず、主人公・倪煥之の足跡は、作者・葉紹鈞のそれと、多くの点で重なりを見せる。(注)3しかし、そのことは、「自叙伝」という方向に向かうのではなく、重要な点において、フィクションが取り入れられて構成される。

作者にとって、この「倪煥之」という作品は、如何なる意味を持つのか。換言すれば、作者は何を目的として、この長篇にとり組んだのであろうか。

結論を先に言えば、作者は、自己の生活史を素材として骨組みを築きながら、自己の思想・精神の変遷史をまとめ上げたいとする欲求を原動力として、この長篇に挑んだのではなかったか。この仮説を、作者自身の直接的な言葉で立証することはできない。そこで、彼の残した作品群を通して、この仮説を探ってみたい。

矛盾の次の指摘にもある様に、葉紹鈞の初期の作品からは、彼の理想主義的人生観を捉えることができる。

「しかし、最初の時期（「隔膜」の時期とでもいおうか、民国八年から十年の作品）葉紹鈞は、人生に対して一個の「理想」を抱いていた。——彼は、それ程「客観」的ではなかった。」(注)4又、葉紹鈞自身も語っている。

「私は、積極的な面に従って、一種の理想を提示していきたいと思う。これは、我々が望んでいて、又、可能であるのに、未だなし得なかったことである。その誠実さと希望は、一様に人々を感動させ得るであろう。」(注)5

作者の抱くこの理想主義から「阿菊」(1920.12.10)、「萌芽」(1921.1.8)、「阿鳳」(1921.3.1)といった作品が、生み出される。これらの中では、少年・少女の純朴無垢な世界や、人類に対する愛が展開される。

こうした「理想」・「愛」を説く作者の姿は、「倪煥之」19章迄の中で描かれる、「理想教育」「理想家庭」の夢を追ひ求める倪煥之の姿にあてはめることができよう。

又、「城中」(1925.11.1)の中では、

10年振りに、生まれ故郷の小さな田舎町に帰ってきた丁雨生は、そこに新時代を目指す中学校を創設しようと奮闘する。しかし、その町のボス達は、これに恐怖し、憤怒する。そして、脅迫し、流言をまき散らし、これを破壊する。

理想主義的教育者、倪煥之の小型版とも見做せる短篇である。

教員の給料欠配にまつわり、転職を求めて、腐心する惠元達(「前途」(1925.3.16))、給料支払いを要求して敢然と闘いに立ち上がる郭先生(「抗争」(1926.12.6))

「倪煥之」では、「教育とは、生活のためのもののみではない。」という言葉で、低賃金の苦しさに目をつぶる煥之の姿が描かれ、空想的・理想主義的側面が、浮き彫りにされる。

「苦菜」(1921.2.6)、「稻草人」(童話.1922.6.7)の中では、

農民の悲惨な現状と、それに対して、全く無力であり、嘆息するしかない知識人の姿が描かれる。

その一方で、「赤着的脚」(1927.11.9)の中では、広東全省農民大会での、中山先生の回想と感慨を描き、それに托して、「農民こそが、一群の中国の新しい力である」と、農民への讃美が語られる。

こうした、農村に対する強い関心——農民の悲惨な現状を踏まえ、未来を担った人間としての期待——は、「倪煥之」の中で、「鄉村師範学校」の計画や、農村ボス・蔣士鏞に牛耳られる、偽「革命」事件の挿入等に写し出されている。又、後でも触れるが、農民讃美の裏返しとしての、知識人の無力感は、「倪煥之」の中では、自己を含めた知識人の否定という形で、繋がっていく。

以上、葉紹鈞の諸作品に表わされる問題意識と「倪煥之」の重なりをみてきた。これらの作品は、夫々の時期に、さまざまな現実とぶつかる中で、作者の抱いた内面の軌跡を物語っている。

「倪煥之」は、1910年・20年代の知識人の典型を描いた、という評価は、間違いのないものであろう。(注)6 しかし、それは同時に、葉紹鈞の思想的・精神的自己総括でもあったのである。

前後半の作品の この「倪煥之」を文学作品として眺める時、又、違った問題点を指摘すると分裂について とができる。

この作品は、全30章のうち、19章辺りで、前半と後半とに分けることができる。ところが、前半と後半とでは、作品の構成が完全に分裂し、統一が失われてしまっている。それと共に、前半の緻密な描写、重層的な筋の展開が、後半に入ると、全く影をひそめてしまう。後半部に見る、この構成上、描写上の欠陥は、作者自身も認めるところであり、1953年人民文学出版社刊の「倪煥之」では、20章と、24～30章を自ら削除している。(注)7

この分裂は、どこから生じたものであろうか、ほぼ一年にわたる長期の連載に、作者の息が続かなかった。掲載雑誌の性格からくる制約——『教育雑誌』は、その記載論文の題目を見る限り、教育を専門とした研究誌の臭いが、色濃いうのである。又は、小説の内容が、当時の政治・社会問題に近づくにつれ、表現上の制約が強く意識され、自由な叙述が困難になった、等の外的要因も、充分考慮されねばならないだろうが、より本質的なものとして、作者自身の持つ内的な要因を考えてみたい。

「倪煥之」の前半を描く作者の態度には、余裕がある。即ち、陋習に凝り固まり、保守的な農村の現実を無視して、自己の理想を、ひたすらに追い求める倪煥之（それは、かつての作者自身の投影であるのだが）を描く作者は、その理想主義の持つ甘さを、乗り越えたところに立っている。

現実主義者で、功利的な金樹伯、同僚の、頑固で保守的な陸三復、小才にたけていて、軽薄な

劉慰亭等の、脇役的人物のリアルな存在は、煥之（それは同時に、校長・蔣冰如、恋人・金佩璋にも通じる）の、現実から遊離した、理想主義を批判して、鋭いものがある。

蔣冰如（進歩的な地主）が、校長になっていることに対して、

「暇で、心配事が何もないから、校長になっていられるのだ。子供達は、彼の慰みものにすぎない。」（金樹伯）

金佩璋の自立を求める心に対して、

「20才前は、何も判らんから、夢見るように独立、独立と騒いで得意になっているにすぎん。一度、嫁に行ってしまうと、幸福になろうが、不幸になろうが、独立できんことに気付く点では同じことさ。」（金樹伯）

教師は、単に生活の手段のためだけで、選ぶべきではない。という意見に対して、

（口には出さず）、「そりゃあ、お前さん（冰如）には金がある。財産家だ、食うためでなくたっていい。だが、俺は貧乏だ、それをお前さんの道楽に付き合えというのか。この新参者（煥之）は、みたところは生活に困らぬ身分でもあるまいに、口先だけ、うまいこといいやがって、校長に、おべっか使っていやがる。」（陸三復）

こうした言葉が、リアリティを持ってはね返ってくるのは、作者が、煥之、佩璋、冰如らの理想主義に溺れ込むのではなく、一定の距離を保って、冷静に眺め得る余裕を持ち得ているからである。

ところが、後半に至ると、こうした貴重な脇役の、生き生きとした姿は消え去せ、革命にのみ心を奪われる倪煥之と、彼を政治的・理論的に援助、指導する革命家・王楽山（彼は、21章に至って、かつての同級生という形で、突然に煥之の前に現れる人物である。）の行動のみを軸とした、単調な展開に変わる。

26・27章で、上海に出る迄の時期、煥之が教育に情熱を燃やした農村において、村のボス・蔣士鏞が、うまく立ち回り、国民党内にもぐり込んで、自己の思うままに革命を操る、偽「革命」事件が描かれるが、それととも、上海での、煥之達の革命運動とは、何らの接点も示さず、エピソード的な挿入に終っている。

この様な前後半の分裂、筋の展開の平板さと同時に、煥之や楽山の人物形象も躍動性を失ってしまう。それは、彼らの生活、行動を通して、思想、感情が描かれるのではなく、会話や独白の形で、生のまゝに思想、感情が語られることからくる欠陥である。

5・30事件後の、緊張感と熱気あふれる上海の町の描写は感動的であるが、これは、作者の言葉によれば、友人の文章を借りたものであるという。（注）8

後半の破綻は、何故生じたのであろう。前半でみせた、あの個性的な人物形象と、立体的な構成は、何故失われてしまったのであろう。

後半の主要人物は、革命実践者としての倪煥之であり、革命家（共産黨員？）としての王楽山である。彼らは、労働者を組織し、革命を指導する人間である。しかるに、作者・葉紹鈞にとっ

て、こうした人物は、一つの憧れではあれ、そこ迄はなり切れなかった未経験の人物であり、未知の世界であった。

例えば、5・30事件を取り上げてみても、作者に「五月卅一日急雨中」という、彼としては珍しく感情的な文章があるが、流された労働者の血に対し、激しく憤り、労働者の力強い言葉に畏敬の念を抱くは、煥之と同じである。ところが、紹鈞は、アジ演説を聞いて奮い立つ側であり、煥之は、熱烈に演説をぶつ側である。革命に対する、この受動と能動の立場の違いは、自ずと、問題の捉え方、言動のあり方に現れてくるはずである。

5・30以降の上海における、北伐に呼応した革命闘争に対しても、紹鈞が、実践者として、革命の内部に身を置いたという痕跡はない。

従って、後半は、作者の経験の世界を離れ、作者の観念のみが先行した描写に流れていったと考えられる。前半の世界は、作者によってしっかりと把握されており、作者は、余裕を持って筆を運ぶことができた。しかし、後半に入るにつれ、作品が、作者を乗り越えたところで展開され、写実的な描写が追いつかなくなったと考えられる。作者が、これ迄とってきた創作態度（主観を排し、客観的現実を描く）を、裏切った形で、筆が進められたのである。

さて、今、「観念が先行した」という表現を使ったが、この「観念」とは、とりもなおさず、革命への強い憧憬である。これ迄の葉紹鈞が、作品の中で暴露し続けてきた、社会の否定面、知識人の消極性批判の裏返しとしての、明るい未来への情熱である。葉紹鈞も又、革命行動に立ち上った他の作家達と同じ様に、革命の進展に強い期待をかけ、解放を願ってきたのであった。それ故にこそ、革命の裏切りに会って、心に受けた傷も深刻であった。作者は、楽山を始め、多くの同志の虐殺、一切の希望を見失った煥之が、酒に溺れ、ついには、腸チフスにかかり、汚れた貧しい宿の一隅で、孤独の死を迎えることなどに、その絶望感を流し込んでいる。

又一方、煥之の「死」をもって、この長篇を締めくくっていることは、今一つの意味を臭わせる。それは、先にも少し触れたが、短篇小説の中でも追求されてきたテーマ——自己を含めた知識人の、厳しい現実を前にしての無力感——である。この知識人の無力感の裏返しが、労働者・農民の荒々しい、力強さに対する憧れに繋がるのであるが……、

腸チフスと知らされ、死を悟った時、煥之は、呻きの中で次のようにいう。

「35才にもならない年で、何一つやり遂げたこともないまゝに、このまゝ死んでしまつてよいのか。……脆弱な能力や、浮わつた感情は、役に立たない。何の役にも立たない……。

成功、これは、我々には与えられない賞品である。将来、我々とは全く異なった人間が現われた時、彼らにこそ、与えられるべきものなのだ。」

この言葉は、自己を含めた知識人の自己否定の意味をこめたものとして、捉えることができよう。

更に、この小説の結末部に、筋の流れからみると異質なエピソードが加えられる。それは、夫の死を知った妻が、今迄の態度（政治に目を背け、社会を考えずに、ひたすら子供のために全てを注いで

きた)を改めて、夫の果せなかった遺志を継ぐ決意を固める場面、あるいは、煥之が、高熱にうなされる中に、幻影として、息子・盤児が、若い革命戦士となって現われる場面、こうした場面の挿入は、それ迄の流れからして、唐突としか感じられず、それ故、文学としてのリアティを傷つけるものでしかない。しかし、敢えてこうした場面を付け加えることによって、自己否定を含む絶望の中で、他者による救済——希望の光を、とどめておきたかったのではないだろうか。

これは、同時期に書かれ、ほぼ同じテーマを扱った短篇「夜」(『小説月報』第18巻、第10号)にも流れ続ける意識である。

母を求めてむずかる幼児(大男)、それをあやししながら、逮捕された娘夫妻の消息を不安と恐怖の中で待ち続ける老婆。そこへ持ち込まれる虐殺の報せ……しかし、老婆は、夫婦が残した短い書き置き「我等死に際し、恨むところなし、想い患うことなかれ、大男の世話をば願う、大男は、即ち、我等なり。」にこめられた気持ちを感じ取り、母親としての責任を、年老いた自分が背負って立つ決意をする。

老婆の視点から写し出される「夜」の世界は、「倪煥之」に見られた破綻もなく、老婆の決意も自然であり、結晶度の高い好短篇である。

絶望のどん底にあっても、どこかに一つの光明を灯さずにはおれない作者の意識——これは、出口を見出し得ぬ暗黒の中にあっても、頹廃や虚無の中に眠り込むことのできない葉紹鈞の人間性を示すと同時に、そうした逃避をも許さぬ、中国の厳しい現実が彼を取り巻いていたことも示すものである。——を、「倪煥之」にダブルさせて取り出しておきたい。

さて、ここで一つのまとめを行なっておきたい。作者・葉紹鈞は、これ迄の自己の思想的、精神的変遷の過程を総括する目的で筆を起こした。そのためには当然、第1次国内革命戦争から上海解放への昂揚と、その挫折感は、書き継がれねばならなかった。特に、彼は、自己の脆弱さをもはっきりと認識した、解決なしの絶望の淵に立っていた。この作者の深い精神的傷痕こそが筆の乱れや、構成上の破綻を意識しつつも、30章迄、筆を運ばせた原動力であったと考えたい。否、この時点で、自己総括を内容とした、長篇に取り組む決意を促した力であった。

この「倪煥之」を完成させた後、それ迄精力的に短篇を書き上げてきた、葉紹鈞の創作活動は停滞をみせる。1929年から、31年へと、この期間、彼の作品を目にすることは、ほとんどできない。彼が、再び作家として、筆を執り始めるのは、32年の頃である。

茅盾・「蝕」三部作

4・12クーデター事件を中心とした社会の動きを題材とした作品では、茅盾の「蝕」も上げることができる。これは、「幻滅」「動揺」「追求」からなる三部作である。作者によれば、「1927年9月中旬から10月末にかけて」(「幻滅」)、「11月初めから12月初めに」(「動揺」)、「1928年4月から6月にかけて」(「追求」)書いたものであるという。

茅盾は、1921年に発足した「文学研究会」の中心メンバーとして、文学理論と翻訳の面で活躍を続けてきた。そして、5・30事件、北伐戦争を経る中で、筆を捨て、革命実践に入っていく。1926年1月から4月には、国民党の宣伝部秘書として、上海を離れ、革命の地広東へ赴き、27年1月からは、革命政府の移動に従って漢口に移り、『民国日報』編集委員主筆となる。

「1925年から、27年までの間、私は、当時の革命運動の指導的中核と、かなりの接触をもっていた。

同時に、私の活動分野も、下部組織や大衆と、常に関係を持つことを可能にしていた。」(注)9

この様に、革命の内部に入り、革命をつぶさに体験する。そして、クーデターに始まる反動の嵐が、武漢に及ぶと、そこを離れて廬山に行き、不眠症と神経衰弱の回復をはかった。その後、上海に舞い戻り、病身の妻を看護しながら、ひたすら創作に専念した。文学評論家から革命活動家へと進み、その失意の中から、創作家への転身を求めた最初の作品が、この「蝕」三部作である。

「実地に生活し、動乱中国の最も複雑な人生的一幕を経験して、ついに、幻滅の悲哀、人生の矛盾を感じた、消沈した気持ちと、孤独な生活の中ではあったが、それでもなお、生活の執拗な支配を受け、私の生命力の余蘊でもって、別な面から、この混迷した灰色の人生の中に、一筋の微光を発したいと思った。そこで、私は創作を始めたのである。」(注)10

茅盾の感じた、「幻滅の悲哀」「人生の矛盾」とは、如何なるものであり、如何なる形で、作品に反映されたのかを追ってみたい。

「蝕」三部 この三部作を一読する時、茅盾が、文学に要求してきた「時代性」の描出が、充作の分析 分に成功しているとはいえない。その原因は、性欲描写の比重が大きいことと併せて、人物の思想・行動が社会的な広がりを持った形で、描き切れていないという点にあるようだ。この印象は、特に、「幻滅」「追求」に強い。それは、

一、「幻滅」の章女士をして、(これは、「追求」の中の史曼春、王仲昭等の青年達にもいえることだが)幻滅の意識を拭い去り、起ち上って新たな追求に駆りたてる、その原動力が、青年一般の情熱といった形で済まされ、深い突っ込みがみられない。そのため、恋に走るも、革命を求めるも、同じ地平に並べられ、羅列的である。その結果、幻滅を重ねる章女士の、思想的・精神的変化が浮き彫りにされず、単調な繰り返しになってしまう。

一、章女士、最後の幻滅の原因は、愛人・強連隊長との別れであり、(「幻滅」)、史曼春の場合は、愛し合い、結婚した妻・朱近如が、実は、饒舌で、軽薄な、嫉妬深い女であることを知ったことであり、王仲昭の場合は、許嫁の陸俊卿が、交通事故に会い、顔に大怪我をすることであり、章秋柳の幻滅は、史循との愛で性病に罹ることであり、史循は、秋柳との爛れた愛欲生活の中で死を迎え、王詩陶は、別れた恋人の種を宿し、生計のために売春行為に走る……(以上、「追求」)

青年達が、挫折し、幻滅する原因が、個人的、偶然的なところで語られていることに気が付く。

以上の諸点は、青年達が心に抱いていた、一般的な絶望感、——現象面に現れた精神的風潮は、

写し取ることはできても、歴史性、社会性の中にそれを位置付けて、その根源を抉り出すという点、「時代性」においては、弱さを残すものとなっている。

こうした不満は残るが、矛盾が、この作品の中で、あくまで追求しようとしたものは、「革命」が、その内部に持っていた矛盾と、その「革命」の失敗、大反動という歴史状況の下、「現状に不満を持ち、苦悶し、出路を求めた」知識青年が「彼らの階級的背景のために、正しい道を追求できず、それ故、彼らの努力は、全て失敗に終わる」その道程であった。又、矛盾は、こうもいっている。

「革命が、まだ訪れない時には、大いに渴望した。目前に迫った時には、まるで明日には黄金世界が実現するかのように、非常に興奮した。しかし、その明日が来て、過ぎ去り、あさってが過ぎ去ると、理想の中の幸福は、悉く無効手形となり、かえって、新たな苦痛が除々に加わってきた」(注)11

以上の様な意図の下に描かれた「蝕」三部作には、「倪煥之」にみられた、煥之や楽山の如き、肯定的・理想的な革命家は、全く登場しない。(たゞ、「動揺」に顔を覗かせる李克は、その中に数えられるかもしれない)一切を、暗黒の闇の中に溶かし込んでしまう。

しかも、矛盾は、青年達の挫折・絶望を描くだけでなく、「革命」それ自身が持っていた矛盾に対しても、鋭い批判を加える。

革命運動の中にもぐり込んだ軍閥のスパイ。政治工作者訓練委員会の中に現われる、何の理解も持たず、役職につくことのみを目的とした人間。つぎつぎと作り出される「政治工作員」は、たゞ、既製のスローガンを叫ぶだけの「膏藥売り」にすぎない。独身女性とみると、気違いの様に「恋愛」を求める青年達、そして、流行病の様に肉の享楽を求め合う若い男女、

革命運動内部に向けられた、この容赦なき批判の目は、葉紹鈞には、見られなかった点である。(「倪煥之」にも、上海解放の混乱の中で、なかなか開校できないとか、郷村師範計画書が具体化しない等の不満を述べた部分はみられるが)

さて、革命路線の左から右への揺れと、その挫折を、大きな流れとしながら、革命政権内部の腐敗と混乱を、緊張した筆運びで描いたのが、「動揺」である。

湖北省にある小さな街のボスであり、権力者である胡国光が、革命勢力抬頭を前にして、国民党組織の中へうまくもぐり込み、極左的言動を武器にして、除々に実権を握っていく。(この過程は、ちょうど革命路線が左傾していた時期に重ねられている)それに対し、方羅蘭(県党部商民部長)は、党で働く奔放不羈な女性——孫舞陽に対する恋愛感情と、妻の嫉妬との間で動揺を重ね、十分な対策を、何ら講じられないまゝに、振り回される。この二人の行動を軸としながら、羅蘭の心を悩ませながら、他の男達とも肉欲の快楽に耽ける孫舞陽、革命的情熱は持つが、直進的であるが故に、胡国光の極左的言辞に惑わされてしまう史俊(省党部から派遣された指導員)、あるいは、労働者・農民の糾察隊、反動派に操られるゴロツキ集団等が、重層的に描かれる。商店労働者の要求を煽りたて、労働者の信頼を掠め取った胡国光は、次に、「婦女解放」のス

ローガンの下、「解放婦女保管所」を作るが、それを、こっそりと淫売窟に変えてしまう。そして、反革命との陰悪な空気が流れる中で、ゴロツキ集団がそこを襲い、暴行、虐殺の修羅場がくり広げられ、動揺・混乱は、一層拍車をかけられる。その中で、国民党右派と結んだ、軍閥の軍隊（夏斗寅の軍隊）の反撃を受け、革命政権は瓦解する。

この「動揺」で示される。中国社会全体を、構造的に見渡す視野の広さと、それを作品化する構成力・人物描写のさえは、矛盾の文学的資質を覗かせたものとして、注目される。この作品の舞台は、小さな街にすぎないが、「革命」そのものに視点を据え、革命から反動へと至る、中国革命の一典型を結晶させることに成功している。又、登場する諸人物の形象も、いきいきとして個性的である。

この作品の、結末部分で、軍閥の蹂躪を逃がれた方羅蘭が、孫陽舞から、残された街の人々に対する残虐非道な暴行場面の報せを聞くが、友人惨殺の報に呆然自失した妻の前で、孫陽舞と交わる情景が描かれる。これは、「知識人と革命の係わり」「その動揺性」を告発して、痛烈である。

「蝕」三部作は、「一、革命前夜の高ぶった興奮と、革命に直面した時の幻滅、二、革命闘争激動期の動揺、三、幻滅・動揺後の寂寞に挫けることなく、なおも、追求を試みる。」(注)12 三つの時期を描くが、全体を覆う色調は、暗黒である。一切の幻想を断ち切った、徹底的な暗黒である。

「倪煥之」を、「意識的に時代現象、社会生活を表現しよう」とした作であるとして、高い評価を与える矛盾も、その内容が、如何に「革命的」であろうとも、その描写が「現実」を、一歩でも離れた時には、厳しく批判する。

「最後の一章では、倪煥之の死後、倪夫人・金佩璋が、突如、勇敢に立ち上がることを書いている。これは、作者が「未来」を確信している意識を持っていて、この様な描き方をしたのであろうが、……金佩璋の豹変は、やや唐突である。……

結末の唐突な転換は、まるで個人の思想の変化が、『奇蹟』のようなものが、不意に降臨することができるのと同じであるかの様であり、せっかち過ぎて、失敗している。」(注)13

「後半部で、我々は、倪煥之が、一幅の天然色の舞台背景の前を移動するだけで、浮わついた、実際とかけ離れた印象を、持つばかりである。……

しかし、後半部に至ると、主人公の倪煥之でさえ、薄っぺらな紙のような人間になってしまって、セットの前を、慌しく動き回るだけである。」(注)14

矛盾の作品には、葉紹鈞の示した革命活動家に対する理想主義的形象も、絶望の中にある微かな希望も、見い出すことはできない。矛盾は、葉紹鈞の持つ、甘さも、観念性も拒否して、よりリアルな眼で、暗黒の現実を見つめていたといえる。

矛盾は、作家達に「鋭利な観察、冷静な分析、綿密な構想」を求めた。ゾライズムを、中国的に焼き直した地点に根拠を置く彼の文学観は、主観を排し、科学的な眼で現実を正しく描き出す

ことであった。その文学観の上に、革命実践の過程で、彼が感じた失望——特に、青年、学生、知識人に対する、強い絶望感が重ねられた時、この「蝕」は生まれた。それ故に、この作品は、徹底的に救いの無い、絶望の作品となったのである。

「革命文学論　この「蝕」三部作と、その創作過程に触れつゝ、文学論を展開した論文「従牯争」に触れて　嶺到東京」は、「革命文学派」の好餌とされた。今、ここで、「革命文学論争」について、分析を加える余裕にないが、日本留学生を中心とした、若手文学者グループが、革命挫折後の沈滞した中国文学界に、「マルクス主義文芸理論」で武装しながら、「プロレタリアートの文学」を、強引に持ち込む中で、引き起こされた論争を指すのである。彼らは、まず鲁迅を、既に時代遅れのものとして槍玉に上げ、ついで、この矛盾の作品に食ってかかったのである。

今、矛盾に対する「革命文学派」の批判点を拾い上げ、それに対する矛盾の切り返しの中から、彼の意識を少し探してみたい。

まず、彼らの時代認識とは、如何なるものであったのか、この論争の先駆けとなった、成仿吾の論にいう。

「資本主義は、既に、最後の時を迎えた、世界には、二つの戦陣が形成されている。一つは、資本主義の残滓『ファシスト』の孤塁であり、一つは、全世界の農民労働者大衆の連合戦線である。それぞれの細胞が、戦闘の目的のために組織されつゝある。文芸の労働者は、その一分野を担当すべきである。前進！ この雄壮な叫びが、諸君には聞こえないのか」(注)15
李初梨は、つぎの様にいう。

「中国の一般無産大衆の激増と、中間階級の貧困化とは、ついに知識階級の自然生長的革命を求めるまでになった。これが、革命文学発生の社会的根拠である。……」

以上の歴史的追求から、われわれは、中国の文学革命が、有産者と小有産者の二つの時期を経過し、しかも、その社会的根拠を失ったがために、すでに没落したものであることを知った。」(注)16

又、別のところでは、次の様に述べる。

「中国革命の初期にあっては、それが内包する要素が複雑であったので、意識の面に反映されたものは、たゞ一種の混合型の革命文学であった。

しかし、国内のブルジョアジー、および小有産知識階級があいついで裏切るという二つの段階を経たのち、すなわち、中国プロレタリアートの Hegemonie が確立した今日、革命文学は当然アウヘーベンされて、プロレタリア文学となった。」(注)17

国民党の裏切りを、清算的に捉え、むしろ、革命の純化、深化であると位置づける。しかし、その論は、機械的であり、楽観的すぎるようだ。それでも、彼らはこうした時代認識を下に「アウヘーベンされた」プロレタリア文学を主張する。その内実は決して明確ではないが、「観照的、表現的」な態度ではなく、「無産階級の級階の意識をもって生み出した。一種の闘争の文学」と

いうのであった。

こうした彼らの立場からすれば、茅盾の幻滅、絶望、暗黒の世界は、なんとしても許せないものであった。しかも、茅盾が、五四以来、文壇を壟断し、『小説月報』に、自由に掲載することができる大家であるという認識があった。それが、一層、高圧的・戦闘的に、集中砲火を浴びせかける動機にもなっていると思われる。

それら多くの批判は、茅盾が、プロレタリア階級を見捨て、プチブル知識人の否定面のみを描き、革命への展望を示しえなかったということに帰着する。その中で、一応の理論的まとまりをみせ、又、代表的と思われる銭杏邨の意見をあげてみると、

「中国では、1927年7月以降、各地の反抗も、当時の(1905年を指す——注岡田)ロシアと同様に、爆発した。つづいて、あまたの英雄的な、不断の闘争があり、それらは全て、中国革命の前途をあらわしている。しかるに、茅盾は、終始、これらの現実を直視せず、逆に、これらの現実を非現実と見做したのである。……

我々は、暗黒の暴露に反対するものではないし、むしろ、暗黒の暴露を強く主張する。しかし、たゞ単に『現実を凝視し、現実を分析し、現実を喝破する』だけでは、何の役にも立たない。我々は『現実を把握すること』に反対はしないが、茅盾は、現在とは、即ち、過去の発展であり、未来は、現在のうちに、育ちまわっていることを、はっきりと認識しなければならない。そして、過去の中の現在から遊離したり、現在の中の未来から離脱してはいけない。」(注)18

しかし、マルクス主義を学生に講じたこともある茅盾にとってこうした初歩的な唯物史観への認識は、自明であったはずである。そうした「理論」を持っていた茅盾が、創作の世界では、何故上記の如き批判を受けねばならなかったのか。その疑問に対しては、彼が短篇小説集「野薔薇」(1929)の前言に述べた言葉が、よい解答となろう。少し長いが、以下引用してみる。

「未来を確信することを知っている人は、幸福であり、讃えられねばならない。しかし、くれぐれも、お願いするが『歴史的必然』をもって己の幸福への予約券とするような、又、この予約券をやたらと発行するようなことは、しないで欲しい。

正しい認識も持たずに、徒らに、予約券を使って、モルヒネ注射の様な『社会の活力』とすることは、砂上の楼閣であり、結果は必然的な失敗があるだけである。未来の光明で、現実の暗黒を粉飾する、この様なやり方を、人々は勇敢だといっている。現実の暗黒を覆い隠しておいて、将来の光明をもって、社会をゆさぶる手段にしようと思うとは、何ということだ！

真の勇者とは、敢えて現実を凝視し、その現実の醜悪さの中から、未来の必然を体得するのであって、それを予約券として、しかる後に始めて、未来を信頼するというようなものでは決してない。真に有効な仕事とは、人々に現実の醜悪さを見透させ、自分自身で、人類の偉大な未来を認識させることであって、そこから確信が生まれるのだ。過ぎ去ったものに、メソメソする必要はないし、未来を誇張する必要もない。現実を凝視し、分析し、喝破しなければならぬ。現実を、はっきりと認識できていない人は、まだ余りにも多い」

ここには、自己の苦い体験を背景として持ちながら、現実の暗黒面から、あくまでも目をそらさずに、解決の道を、見い出そうと苦悩する茅盾の姿がある。彼が、

「これからは、奮起して、再び頽廃をくり返さないことを望んでいる。私は、そのことがきつとできるものと信じている。私には見えるのだ、北欧の女神の一人が、厳かに、私の目の前に立って、私の前進を促してくれるのが、彼女の永遠の戦闘精神は、私を、前進へと駆りたてるのだ！」(注)19

と、述べるが、その道は単純な道ではないはずである。何故なら、茅盾にとって、その「前進」とは、単に観念的・理論的なものにとどまるのではなく、その前進の道を形象化し作品として結実させるためには、あくまで、現実の中に、己の眼を通して、それを認識するのだからならなかったからである。つまり、文学の特殊性を堅持した上での、認識であり、この姿勢は、茅盾の中に一貫して流れていくものであった。そして、「從牯嶺到東京」の中で、示唆を与えた、「小資産階級——小商人、中小農民、没落知識人——に題材を拡大せよ」の理論を、発展させ、作品として結実させたのが、30年代の中国文学のみならず、現代中国文学を代表する秀作「子夜」になるのである。

お わ り に

さて、以上葉紹鈞と茅盾の作品分析と、比較検討を通して、両者の意識を探ってきた。誠実ではあったが、決して、戦闘的ではあり得なかった葉紹鈞、絶望的現実を凝視しながら解決を模索し続けた茅盾、この二人にとって、クーデターから反動へと至る変動の与えた衝撃は、小さくはなかった。

魯迅を始め、他の多くの作家達は、如何に対処したのであろうか、彼らの内面の何が変わり、又、変わらなかったのか、

一方、この時期は、30年代に入って活躍する、新しい世代の作家達が、筆を執り始めた時期でもある。丁玲「夢珂」(1927)、巴金「滅亡」(1927)、老舍「趙子曰」(1927、「老張的哲学」1926につづく第二作)、沈從文「入伍後」(1927)、張天翼「三天半的夢」(1929) こうした、新しい世代の意識は、如何なるものであったのか、

又、この論でも少し触れたが、1928年に始まる「革命文学論争」を、巻き起こした作家の意識は、如何なるものであり、その論争の残したものは、何であったのか、解明されるべき問題は余にも多いと思われるが、ひとまず筆を置きたい。

1974. 9. 8.

《 注 》

1. 冷静地諦視人生，客觀的地，写實的地，描写着灰色的卑賤人生的是葉紹鈞……要是有人問道：第一個「十年」中反映着小市民知識份子的灰色生活的是那一位作家的作品呢？我的回答是葉紹鈞。

（「中国新文学大系小説一集」導論 1935.3.10）

2. 「随便談談我的写小説」1933.4.5
3. 葉紹鈞と「倪煥之」との一致点

項 目	葉 紹 鈞	倪 煥 之
生 年	1894年	同じ頃(没年1927年・34才)
生 誕 地	江蘇省呉県	呉淞江上流の田舎町（呉県は呉淞江上流の町）
家 業	地主の租税管理	両替屋の手代
中学入学の経過	1906年に科举制度廃止され、新制中学に入る(12才)	左に同じ
辛亥革命に対して	中学卒業年次に革命を経験	左に同じ
就 職	家計の苦しさ故、卒業と同時に小学教師の職に就く	左に同じ
そ の 後	10年間、小学教師を続け、その間二度学校を変える	二度学校を変った後、小説の舞台である小学校に赴任する
結 婚	1916年教師の胡墨林と見合い結婚をする	小学校教師金佩璋と恋愛の後結婚、1917年頃？
そ の 後	1921年中学教師、1923年、上海商務印書館に就職	1925年春、上海の女子中学校に教師として赴任

葉紹鈞の経歴は次のものによった

「過去随談」1930.10.29.『中学生雑誌』

「作家小辞典」『読書月報』1957.8月号

「School-master. Ni-Huan Chih」“About the Author”

4. 「中国新文学大系・小説一集」導論 1935.3.10
5. 「創作的要素」1921.7.
6. 這篇小説通過小学教師倪煥之の経歴、反映了從『五四』到一九二七年大革命時期某些小資產階級知識分子的精神和思想面貌（「中国新文学史初稿」劉綬松・1956.4）
我們能更清楚地看出「五四」以來到一九二七年大革命時期某些小資產階級知識分子的真實面貌和他們走向革命的艱苦的道路（「從空想走向現實」方白，『大公報』1954.6.9.）
7. 《倪煥之》原有三十章。一九五三年人民文学出版社準備把它重印，有几位朋友向我建議，原来的第二十章和第二十四章到末了兒的七章不妨刪去。我接受了他們的建議，因此，一九五三年的版本只有二十二章（「葉聖陶文集」〔三〕前記 1958.5.22）
8. 応得説明這篇里第二十二章的上半是采用了一位敬愛的朋友的文字，他身歷這大事件，我沒有，他記載這大事件生動而有力，我就採挿入需要的處所（「倪煥之」作者自記，開明書店版 1929.8.16）
9. 「茅盾選集」自序，開明書店版 1952
10. (注)11,12,19「從粘嶺到東京」1928.10
13. (注)14.「讀『倪煥之』」1929.5.4.
15. 「從文学革命到革命文学」1927.11.23
16. 「怎樣地建設革命文学」1928.1.17.
17. 「請看我們中国的 Don-Quixote 的乱舞——答魯迅《醉眼中的朦朧》——」1928.4.10
18. 「茅盾與現實」四「野薔薇」1930.7.17.

この論文のテキストとして、「倪煥之」は、「葉聖陶文集」〔三〕1958年、『人民文学出版社』刊を、「蝕」は、1927年『小説月報』第18巻，9,10号，1928年第19巻1,2,3,6,7,8,9号を使った，どちらも，改訂が重ねられているが，特に「蝕」については，原作と，改訂版の違いは，内容にまで及ぶ，従って『小説月報』所載のものによった。なお，「蝕」の改作については，是永肇氏の詳細な調査のあることも付け加えておく。（鹿兒島経大論集」第14巻第3号）